

高梁市の高原部に住む高齢女性の暮らし

野 邊 政 雄

本稿では、まず、過疎化と高齢化が岡山県高梁市を構成する各地区でどのくらい進行しているかを国勢調査のデータによって明らかにした。次に、筆者が1999年4月から5月にかけて高梁市で聞き取り調査をおこなったが、この調査によって収集した事例のうちから4つの事例を提示した。これを検討することによって、同市の高原部に住む高齢女性がどのような暮らしをしているかを明らかにした。

Keywords：高梁市，吉備高原，高齢女性，過疎化，高齢化

1 本稿の目的

図1に見るように、高梁市は高梁川の中流域にあり、高梁川が同市の北西から南東に流れている。成

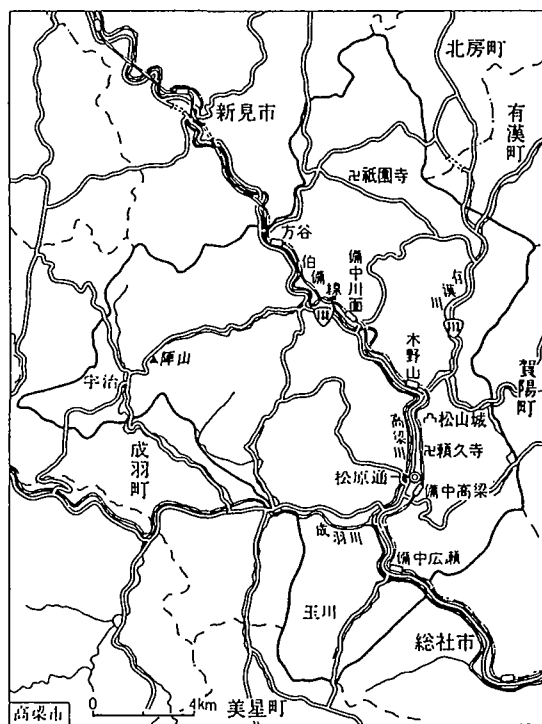


図1 高梁市市域図

出所：「角川日本地名大辞典」編纂委員会編
『角川日本地名辞典33 岡山県』1989年
角川書店 1301頁

羽川が市の南部で高梁川に合流している。また、有漢川や津々川などが同市内で高梁川に流入している。JR 伯備線と国道180号線が高梁川に沿っており、国道313号線が成羽川に沿ってある。高梁川や成羽川が山の谷あい流れ、川に沿って狭い平野がある。山々は平野に迫っているため、平野部の両側がただちに山に登る急斜面へと続いている。山の斜面は山林である。山を登りつめると、比較的平坦な高原（吉備高原）が山頂部に開けている。平野部からは高原部を見ることができない。山を登りきったところに、高原が突然出現するのである。このように、地形的に見ると同市は、①高梁川、成羽川、それらの支流に沿った谷底平野部、②おおむね300メートルから500メートルの高原部（吉備高原）、③両者の中間にある傾斜部からなっている。総面積の約77%が山林原野である。谷底平野部は市街地となっていたり、水田や畑として利用されている。高原部の平坦部は水田、緩斜面は畑として利用されている。傾斜部の多くは山林であるが、緩傾斜の部分は棚田や畑となっている。

高梁市は次のような歴史的経緯をたどって生まれた。高梁町と周辺の8村（津川村、川面村、巨瀬村、玉川村、落合村、高倉村、宇治村、松原村）が1954年に合併して、高梁市が成立した。翌年の1955年に、高梁市は1村（中井村）を合併した。1970年には賀陽町の一部を編入し、現在に至っている。かつての村は現在では高梁市を構成する町となってお

り、例えば、津川村は高梁市津川町となっている。こうした合併の歴史から、同市は現在10の地区（町）から成り立っている。つまり、旧高梁町（本稿では、1954年の合併以前に高梁町であった地区をこのように呼ぶ）、津川町、川面町、巨瀬町、中井町、宇治町、松原町、玉川町、高倉町、落合町である（図2参照）。市役所は旧高梁町にあり、それ以外の地区には地域市民センターないし出張所がおかれている。

高梁川に沿ってできた比較的広い平野が備中高梁駅周辺にあり、高梁市の中心的な市街地となっている。このあたりが旧高梁町である。最近では、旧高梁町の西隣にある落合町で市街地化が進展し、人口増加が著しい。つまり、高梁川をはさんだ備中高梁駅の対岸と備中高梁駅から成羽町に続く国道313号線の沿道に、商店や住宅が増えている。こうした市街地に、駐車場が付設された郊外型の大型店（専門店のテナントやレストランの入居した総合スーパーマーケット）が1990年に2つ建設されたことも、付け加えておかねばならない。1つ（天満屋ハピータウン）は旧高梁町の市街地のはずれ（南側）に、もう1つ（イズミ）は成羽川の北側にある落合町阿部に出店した。駐車場を備えているので車で乗って行って買い物ができる上に、商品の品数も多く、値段も安い。これらの大型店はとても繁盛している。

宇治町と松原町は高原部にあるが、これ以外の地区は谷底平野部、傾斜部、高原部にまたがっている。

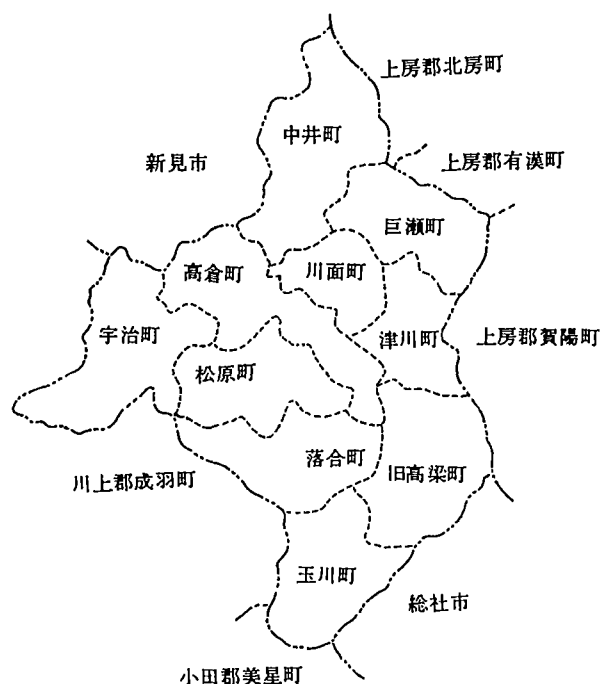


図2 高梁市を構成する地区

る。後者のような地区では、地域市民センターないし出張所は谷底平野部にあり、その周辺が地区の中心となっている。例えば、川面町は伯備線の備中川面駅あたりの谷底平野部とその東にある傾斜部および高原部からできている。伯備線の備中川面駅の周辺に、小規模な市街地ができている。その市街地の中に、川面出張所がある。

筆者は調査員を雇用し、高梁市に住む65歳以上80歳未満の高齢女性を対象にパーソナル・ネットワークとソーシャル・サポートに関する調査を1997年から1998年にかけて実施した。そして、523人の高齢女性から回答を得ることができた（野邊 1999）。この調査が完了した後に、筆者はそのうちの約100人の高齢女性を1999年の4月から5月にかけて自ら訪問し、どのような生活をおくっているかの聞き取りをおこなった。本稿では、聞き取り調査にもとづいて、高原部に住む高齢者がどのような暮らしをしているかを解明したい。具体的には、①国勢調査のデータを用いて、高梁市の各地区の過疎化と高齢化を検討し、②高原部の特色を説明し、③高原部の高齢者の生活を概説し、④高原部に住む高齢女性の4つの事例を提示し、⑤事例の検討をおこなう。こうした作業を通して、高原部に住む高齢女性がどのような暮らしをしているかを解明したい。

2 高原部の過疎化と高齢化

前述のように、高梁市は10の地区からなっている。国勢調査のデータによって、高梁市の各地区における過疎化と高齢化の現状を提示する。

表1の左半分は、1965年と1995年における各地区の人口、および1965年の人口を基準としたときの1995年の割合を示している。落合町の1965年の人口は3,250人であったが、1995年には5,676人に増加した。つまり、落合町では、1995年の人口は1965年の1.75倍になっている。落合町阿部には工業団地が造成され、落合町の平野部で住宅が近年増加しているので、人口が増加しているのだ。ところが、落合町以外の地区では、人口が減少している。とりわけ、玉川町、宇治町、松原町において、人口減少が顕著である。例えば、1965年における玉川町の人口は1,348人であったが、1995年には637人となった。1995年における同町の人口は1965年の47.3%にまで減少している。この30年間で、宇治町では49.9%、松原町では53.1%にまで人口が減少してしまった。宇治町と松原町のすべての地域は高原部にあり、その他の地区は谷底平野部、傾斜部、高原部にまたがっている。したがって、過疎化が主に高原部にある地区で進んでいることが分かる。

表1 高梁市を構成する地区ごとの人口と世帯数の変化

	人 口 (人)			世帯数 (世帯)		
	1965年(A)	1995年(B)	(A)÷(B)	1965年(C)	1995年(D)	(C)÷(D)
旧高梁町	11,807	10,017	0.848	3,228	4,316	1.337
津川町	1,977	1,595	0.807	461	520	1.128
川面町	2,210	1,561	0.706	476	456	0.958
巨瀬町	2,257	1,496	0.663	486	422	0.868
中井町	2,607	1,541	0.591	549	478	0.871
玉川町	1,348	637	0.473	283	221	0.781
宇治町	1,908	953	0.499	391	297	0.760
松原町	1,995	1,059	0.531	422	342	0.810
高倉町	1,968	1,537	0.781	405	456	1.126
落合町	3,250	5,676	1.746	709	1,757	2.478
合計	31,327	26,072	0.832	7,410	9,267	1.251

出所：高梁市総務部企画課編集『市勢のしおり 平成9年版』より作成

表1の右半分は、1965年と1995年における各地区の世帯数、および1965年の世帯数を基準としたときの1995年の割合を示している。旧高梁町、津川町、高倉町、落合町では、世帯数が増加している。とくに、落合町の世帯数の増加が顕著である。数値をあげれば、落合町の1965年の世帯数は709世帯であったが、1995年には1,757世帯に増加した。つまり、1995年の世帯数は1965年の2.48倍になっている。前述のように、市街地化が同町で近年進展しているためである。旧高梁町、津川町、高倉町では人口が減少しているにもかかわらず、世帯数が逆に増加している。例えば、1965年に旧高梁町の人口は11,807人であったが、1995年には10,017人となったというように、この30年間に人口は84.8%にまで減少している。ところが、1965年に3,228世帯であったが、1995年には4,316世帯となったというように、世帯数は33.7%も増えている。吉備国際大学が平成2年に開学し、アパートやマンションに単身で住む学生が増加したので、旧高梁町の世帯数が増えたのである。津川町と高倉町でも世帯数が増加しているが、これは両町の谷底平野部で住宅が増えているからである¹⁾。さらに、次の理由もある。若い人々の多くは農業以外の仕事に就くために大人になると両親のいる実家を出て、他の場所で住居を構えるが、彼らの両親は農村にとどまる。そのため、若い人々の流出によって、世帯数はそれほど減少していない。これらの理由から、世帯数が津川町と高倉町では増加したと考えられる。

旧高梁町、津川町、高倉町、落合町以外の地区では、世帯数は確かに減少しているが、世帯数の減少は人口減少に比べてそれほどではない。例えば、宇

治町では、1965年に391世帯であったが、1995年には297世帯となったというように、世帯数は76.0%になったにすぎない。人口がその期間に49.9%になったことを考慮に入れると、世帯数の減少はそれほどではない。若い人々の多くは大人になると両親のいる農村を出て、他の場所に住むようになるが、彼らの両親は農村に住み続ける。だから、若い人々の流出によって、世帯数はそれほど減少しなかった。それと、川面町と玉川町の谷底平野部では、住宅が増えている。これらの理由から、それらの地区では世帯数があまり減らないで、人口が大幅に減少したのである。

表2は、1995年における各地区の全人口に占める高齢者の割合、および同年の全世帯数に占める高齢単身世帯の割合、高齢夫婦世帯の割合、高齢者世帯の割合を示している。ここでは高齢者を65歳以上の人と定義する。高齢夫婦世帯というのは、夫と妻両方が65歳以上で、夫婦のみで暮らしている世帯である。高齢単身世帯数と高齢夫婦世帯数の合計を高齢者世帯数とする。

高齢者の割合をまず見ると、巨瀬町、中井町、玉川町、宇治町、松原町、高倉町では、その割合が30%を越えている。なかでも宇治町と松原町における高齢者の割合は高い。宇治町の割合は36.8%であり、松原町の割合は35.9%である。若い人々が高原部を出て行き、高齢者がそこにとどまっているので、高齢化が進んでいるのだ。これに対し、市街地化の進展が著しい落合町では、高齢者の割合は15.9%と最も低い。これに次いで低いのは、20.3%の旧高梁町である。宇治町と松原町のすべての地域は高原部にあるから、高齢化が高原部にある地区で進んでいる

表2 高梁市を構成する地区ごとの高齢者の割合と高齢者世帯の割合（1995年）
（単位：％）

	高齢者の割合	高齢単身世帯の割合(A)	高齢夫婦世帯の割合(B)	高齢者世帯の割合(A)+(B)
旧高梁町	20.3	7.2	7.1	14.3
津川町	23.4	7.1	10.1	17.2
川面町	29.0	7.5	16.4	23.9
巨瀬町	32.8	10.0	15.6	25.6
中井町	33.6	12.3	15.3	27.6
玉川町	33.3	13.1	20.8	33.9
宇治町	36.8	11.7	20.4	32.1
松原町	35.9	11.1	24.0	35.1
高倉町	30.4	12.1	16.0	28.1
落合町	15.9	4.1	6.0	10.1
高梁市全体	23.7	7.7	10.2	17.8

出所：国勢調査の小地域集計より作成。

注：1995年の各地区の人口と世帯数は、表1を参照

ことが分かる。

次に、高齢者世帯の割合が高いのは、玉川町、宇治町、松原町である。最も割合が高いのは35.1%の松原町であり、玉川町の割合は33.9%、宇治町の割合は32.1%である。つまり、これらの地区にある約3分の1の世帯では、高齢者だけが単身ないし夫婦で暮らしているのだ。これに対し、落合町の高齢者世帯の割合は10.1%と最も低い。

以上を要約すれば、次のようになる。落合町以外の地区で、人口が減少している。とくに、玉川町、宇治町、松原町で、人口減少が顕著である。人口減少の見られる一部の地区では（旧高梁町、津川町、高倉町）、世帯数は逆に増加している。その他の人口減少地区でも、世帯数はそれほど減少していない。次に、高齢化が高梁市全体で一様に進んでいるのではなく、宇治町と松原町においてそれが顕著である。こうしたことから、過疎化と高齢化が主に高原部の地区で進行しているといえる。

ところで、高原部のなかでも、バス路線に沿った部落²⁾かどうかによって過疎化や高齢化の進みぐあいが異なっている。筆者は1999年の4月中旬から5月初旬にかけて聞き取り調査に出かけたが、バス路線からはずれた部落では、ひとけがなく、中学生以下の子供の姿をあまり見ることができなかった。ところが、バス路線に沿った部落では、住民が昼間道ばたで立ち話をしていたり、子供が遊んでいるのを見ることができた。訪問した時期が子供の日の前後だったので、鯉のぼりを立てた家^{あなた}がかなりあった。

玉川町下切^{したきり}と宇治町穴田^{あなだ}という2つの大字の人口構成によってそのことを例示したい。玉川町下切を

まず見てみたい。この大字は成羽川の南側の高原上にある。成羽川が高梁川に合流する地点からこの部落に登る細い道があるけれど、バスは通っていない。1995年における下切の総人口は54人で、世帯数は29世帯にすぎない。そして、15歳未満の人はまったく住んでおらず、高齢者の割合は63.0%にもなっている。そして、27.6%が高齢単身世帯、37.9%が高齢夫婦世帯、つまり、65.5%の世帯では高齢者が単身ないし夫婦のみで暮らしているのだ。これと対照的なのは、宇治町穴田である。この大字は宇治町の最も西にあり、成羽町に接している。バスが備中高梁駅と宇治町穴田との間に平日の朝と夕方に1往復ずつしている。穴田の総人口は370人、世帯数は119世帯であった。15歳未満の年少人口の割合は13.2%であり、高齢者の割合は41.4%である。そして、10.1%が高齢単身世帯、26.1%が高齢夫婦世帯、つまり、36.2%の世帯で高齢者が単身ないし夫婦のみで暮らしているだけだ（国勢調査による）。このように、宇治町穴田では子供がいるし、高齢化が進んでいても下切ほどではない。

3 高原部の特色

宇治町と松原町のすべての地域は高原部にあり、その他の地区は谷底平野部、傾斜部、高原部にまたがっているということは前述した。では、高原部というのはどういった地域であるかを説明したい。

(1)地理

前述のように、高梁市はこれまでに周辺にある村々を合併して成立した。それぞれの地区で合併以

前に村役場のあったところは、現在、地域市民センターないし出張所になっている。小規模な市街地がその周辺にあり、今でも地区の中心となっている。このことを宇治町を例に紹介したい。

高原部は比較的平坦であるといっても、緩斜面の土地がほとんどである。ただし、宇治町宇治の一帯は高原部では例外的に平坦な土地が広がっている。宇治町総合会館がその中心にあり、地域市民センターと公民館がこの会館の中に入っている。診療所が会館の中にあり、医師が週に3回来て、診療をしている³⁾。会館の隣には、市立幼稚園、市立宇治小学校、市立宇治高校（昼間定時制）がある。近くには、駐在所、郵便局、農協の支店、ガソリンスタンド、食堂（仕出し屋）がある。小さな商店も3軒あるが、生活に必要なものをすべて買い揃えることができるわけではない。縫製工場が近所にあり、付近の女性が働いている。まわりには、田畑が広がっている。備中高梁駅と宇治町宇治との間には、バスの便が一日に6往復あり、備中高梁駅から宇治町宇治までバスで44分で行ける。宇治町宇治では、生活関連施設は高原部の中ではかなり整っているといえる⁴⁾。

宇治町の他の場所には、宇治町宇治ほど広い平坦な土地はない。緩斜面の土地が高原部に多いので、農民は其中でもできるだけ平らな山林を開墾し、田畑にしている。なかには、かなり急な斜面を開拓し、棚田や畑にしているところもある。このように、宇治町の他の場所は農村地域である。そして、駐在所、郵便局、商店、ガソリンスタンド、食堂などといった生活関連施設がそこにはない。また、バスの路線から外れた部落もある。

(2)交通機関

高梁市における公共交通機関は、JR 伯備線とバスである。備中高梁駅には駅員が勤務しているが、その他の JR 伯備線の駅は無人駅である。新見市は高梁市の北にある。各駅に停車する普通電車は備中高梁駅と新見駅との間に1日約15往復ある。備中高梁駅を起点として市内の各所にバスが出ている。落合町を経由して成羽町へ行く（成羽川に沿う国道313号線を走る）バスの便が1日25往復、有漢川に沿って津川町と巨瀬町に行くバスの便が1日20往復ある。しかし、川面町、宇治町、松原町に行くバスの便は1日6往復しかないし、最も北にある中井町に行くバスの便は1日5往復だけである。備中高梁駅から玉川町の備中広瀬駅を経由して矢掛町に行くバスの便が1日2往復ある。バスは生徒の通学や高齢者の買い物や病院への通院のために主に利用されて

いる。

筆者は高原部に住む高齢者の聞き取り調査に行くためにバスに何回も乗ったけれど、乗客はバスにあまり乗っておらず、採算が取れているとは思えなかった。また、統計でもそのことを裏づけることができる。備北バスと北振バスという2つの会社が高梁市で路線バスを運行している。1994年度における備北バスの平均乗車密度は5.3人で、北振バスのそれは2.0人である（高梁市総務部企画課 1995, p.94）。備北バスは高梁駅前と成羽町といった乗客の多い路線バスを運行していても平均乗車密度が5.3人となってしまうことから、高原部を走る路線バスの乗客の少なさを想像できるだろう。

バスの運転手によれば、乗客が少ないからといってバスを廃止できないという。バスが廃止されて、バスも通っていない辺鄙な場所というレッテルが部落に張られてしまうと、その部落の若者が配偶者を得にくくなる。また、高齢者の多くは車を運転できないので、買い物や病院に行くのにバスを利用している。バスが廃止されると高原部の過疎化がいつそう進むし、そこに住む高齢者が生活できなくなってしまうのである。そのため、市役所がバスの運行に財政的補助をして、バスの運行を維持している。1994年度には、市役所は約1,200万円の補助金をバス会社に出した（高梁市総務部企画課 1995, p.94）。

前述のように、備中高梁駅を除いて、伯備線の駅周辺に発達した市街地は小規模であるから、タクシーの需要が高いとはとても思えない。にもかかわらず、個人タクシーの店が駅前にある。（ただし、備中広瀬駅の駅前に個人タクシーの店はない。）タクシーは、主に高原部に住む高齢者が買い物や病院に行くのに利用されている。こうした送迎の需要が大きいので、個人タクシーの経営が小さな市街地でも成り立つのだ。

(3)学校

1999年現在、高梁市には小学校が11あり、中学校が3つある。旧高梁町には小学校がないが、西隣の落合町には3つの小学校がある。旧高梁町と落合町以外の地区には、1校ずつ小学校がある。宇治町と松原町の小学校は高原部にあるが、その他の小学校は高梁川、成羽川、および阿河川の支流に沿った平野部にある。後者のような地区では、高原部に住む小学生は山を下りて通学することになる。中学校は、伯備線沿線の駅、つまり、備中高梁駅（市立高梁中学校）、木野山駅（市立高梁東中学校）、備中川面駅（市立高梁北中学校）の近くに1校ずつ、高梁市内であわせて3校あるだけだ。つまり、中学校は

高梁川に沿った平野部にしかなく、両側に広がる高原部には1校もないのである。だから、高原部に暮らす中学生は山を下りて通学することになる。高原部に住んでいて、平野部の小中学校に通っている生徒は、親が職場に通勤する車に同乗したり、バスで通学している。そうした生徒のいる家庭では、子供の通学のために交通手段を確保してあげることが大きな問題である。

(4)農業

高原部で農業をすることはたいへんである。平坦な土地にある田畑では、平野部にある田畑と同じように農耕用機械を使って耕作できるが、平坦な土地は高原部には少なく、斜面が多い。斜面の一部も開墾され、棚田や畑となっている。また、山林に近いことから、イノシシによる農作物への被害もある。高原部の農家はたいてい犬を飼っている。イノシシが家の近くに来ると、犬がほえて、イノシシを追い払えるようにである。また、農民は田畑をトタン板で囲ったり、裸の電線を田畑のまわりにめぐらして電流を流して、イノシシが田畑に入り込まないようにしている。

さて、単身ないし夫婦で高原部で暮らしている高齢者もいるが、子供夫婦と同居している高齢者もある⁹⁾。高齢者の多くは農業をしている。子供夫婦が年老いた両親と同居している場合、子供夫婦は専業で農業をしているわけではなく、その夫やときには妻も農業以外の仕事に就いている。高原部には、職場があまりないので、そうした人々は旧高梁町や落合町にある市街地、岡山市、倉敷市などに通勤している。そして、多くの場合、子供夫婦は週末に農作業をしているだけである。高齢者が子供夫婦と別居していても、子供が農繁期に来て、農作業を手伝うことが多い。高齢者が一人暮らしであったり、体が丈夫でない場合は、子供が毎週の週末に来て、農作業や家事をしていることもある。農耕用機械が近年普及したおかげで、それほど労力や時間をかけなくても農業ができるようになった。だから、子供が週末に農作業をおこなうくらいで米を作れるのだ。

年をとって体力がなくなってくると、高齢者は農作業をだんだんしなくなる。まず耕作をやめるのは、農作業がたいへんな斜面にある棚田や畑である。高原部を歩くと、樹木や雑草が高くまで生い茂った棚田や畑をしばしば目にする。3年ほど耕作をせず放置しておくと、棚田や畑はもとの山林になってしまうそうである。

4 高原部の高齢者の暮らし

高原部で暮らす高齢女性の事例を提示する前に、高原部に住む高齢者がだいたいどのような暮らしをしているかを説明しておきたい。

高齢者の一部は子供夫婦と同居しているが、高原部における同居は都市におけるそれとは実態が異なっている。広い敷地が農家にはあるので、住居は母屋と離れといったようにいくつかの家屋からなっている。高齢者と子供夫婦は多くの家では別の家屋に住んでいる。高齢者が子供夫婦とこのように同居するということは、実態としては近居に近いのである。

多くの高齢者は同居する子供夫婦にかなり気を使っていた。食事は一緒にするが、あとは別の家屋で暮らし、お互いに干渉し合わないようになっている。なかには、若い人たちとは好みが違うということで、食事も別々にしている家もある。ある高齢女性は、「同居している子供夫婦にはできるだけ面倒をかけないようにしている」と言っていた。また、別の高齢女性は、「嫁いできたときには夫の親に仕え、年を取ってからは息子夫婦に仕えないといけない」とこぼしていた。

体が丈夫であれば、高齢者は農作業などをしながら1日の大半を自分の部落内で過ごす。買い物、病院への通院、美容院や美容院での髪の手入れなどに、部落の外に行くくらいである。体が悪ければ行動範囲が制約されてしまうので、高齢者が部落内で過ごす時間は更に長い。いずれにせよ、高原部に住む高齢者は部落内で1日の大半をおくっていて、部落の外に出かけることはあまりない。

大部分の高齢者は若いときは農業をしており、国民年金に加入していた。現在では、国民年金を受給しているが、その額は年間100万円くらいである。これが主な収入源である。ただし、高齢者は米や野菜を栽培しているので、食料はかなり自給できる。だから、それほど出費をしなくても生活はできる。このことが、都市に住む高齢者と大きく異なる点である。

前述のように、高原部ではバスの便が少ない。そのために、高齢者と同居する子供夫婦が車を運転するだけでなく、体が丈夫であれば高齢者もたいてい車を運転する。高原部における人々の暮らしは車の利用に大きく依存しているから、一家の人が1台の車を共有するのでは、各人が自由に動かして行けない。だから、一家に2台以上の車がたいていある。

5 高齢女性の事例

(1)事例の選択

前述のように、筆者は約100人の65歳以上80歳未満の高齢女性に聞き取り調査をおこなった。これらの中から、次のような基準からここで取り上げる事例を選択した。まず、高齢者にとって子供は重要なサポート源であると考えられる。だから、高齢者が子供と同居しているかどうかによって、入手できる援助で大きな差異があることを予想できる。次に、高齢者が健康であるかどうかによって、高齢者が他人に求める援助の種類と量が違っていると予想できる。つまり、健康であれば、高齢者は他人に援助をそれほど求めなくても生活できる。けれども、身体が虚弱になったり、病気を患ったりすると、高齢者は自立できなくなり、他人から援助を受けて暮らさざるをえなくなる。以上のことから、①高齢女性が子供夫婦と同居しているかあるいは別居しているか、②高齢女性が健康であるかあるいは身体が不自由であるかどうかという2つが、事例を選択する際の重要な基準であるということに思い至った。ところで、紙幅の制約から、紹介できる事例数は限られている。65歳以上80歳未満の高齢女性では、配偶者がいる女性が配偶者のいない女性よりも多い。そこで、配偶者のいる高齢女性のみをここでは取り上げることにした。上述した2つの基準を組み合わせ、次の4つの配偶者がいる高齢女性の事例を選んだ。第1の事例は、子供と別居していて、健康な高齢女性である。第2の事例は、子供と別居していて、身体が多少不自由な高齢女性である。第3の事例は、子供と同居していて、健康な高齢女性である。第4の事例は、子供と同居していて、身体が不自由な高齢女性である。

なお、パーソナル・ネットワークとソーシャル・サポートは別稿（野辺 1999）で説明した方法で調査した。

(2)事例の提示

〔事例1〕 子供夫婦が県内で別居している、健康な高齢女性の事例

①現在の暮らし

高齢女性のAさんは高原部で夫と2人で暮らしている。夫婦とも67歳で、健康である。

まわりは農家ばかりで、商店はない。バスはこの部落には走っていない。だから、車がないと買い物にも行けず、生活がとても不便である。部落には50年前は25軒あったが、高齢になり、子供と同居するために部落を出ていった人がいるので、14軒に減ってしまった。部落は2つの組に分かれており、7軒

がそれぞれに属している。葬式はかつてはそれぞれの組の中だけで助け合ってやっていた。しかし、最近では世帯が少なくなったので、葬式を組の中だけではおこなえなくなってしまった。そこで、部落全体で葬式をおこなうようにし、葬式を出す家と同じ組の家は2人、別の組の家は1人が出て手助けをすることにした。部落の中で、小学生の子供のいる家が少なくなり、3軒だけになってしまった⁹⁾。

Aさん夫婦は年を取ったので、農地を売ったり、他人に田を貸している。現在、自家用に野菜を栽培したり、次男に手伝ってもらいながら米を作って多少出荷しているだけである。夫婦で農業をして1日のほとんどを自宅や田畑で過ごしている。イノシシがこのあたりに出没するので、Aさん夫婦は家の前にある畑をトタン板で囲って、イノシシが畑に入り込めないようにしていた。

夫が車を運転するが、Aさんは車の運転はしない。Aさんは週に1度くらい備中高梁駅の近辺に行って、買い物をする。夫がいるときは、夫に車を運転してもらって備中高梁駅の近辺に行く。夫がいないときは、タクシーで備中川面駅まで行ったり、備中川面駅まで歩いて、そこから電車に乗って備中高梁駅に行く。年に数回は倉敷駅や岡山駅まで行き、その近くで買い物をしている。1週間に2度ほど車で魚や食料品を売りに来るので、その人から買うこともある。

②高原部に住み続ける理由

長男も次男も同居を勧めてくれるが、この部落を出て都会に住むと、仕事がなくなってしまう。ここに住んでいれば、野菜作りなどの仕事がある。だから、夫が車の運転ができる限りは、Aさん夫婦はこの部落に住み続けるつもりである。

③パーソナル・ネットワークとソーシャル・サポート

Aさんのパーソナル・ネットワークは図3のようである。パーソナル・ネットワークは夫、息子、娘、および子供たちの配偶者といった親族から主に構成されている。

夫と助け合いながら農業をしている。夫には車で送迎をしてもらったりもする。長男夫婦は倉敷市にいる。長男は会社で役職に就いていて、日曜も出勤することもあるし、いつ会社に呼び出されるかわからない。だから、農作業をほとんど手伝えない。農繁期の日曜に1日ほど顔を見せるくらいである。長男の家族は正月、5月の連休、お盆休みには帰ってくる。電話では、長男とは月に数回は話をしている。次男夫婦は山を下ったところにある備中川面駅の駅前に住んでおり、車で10分くらいで行ける。次

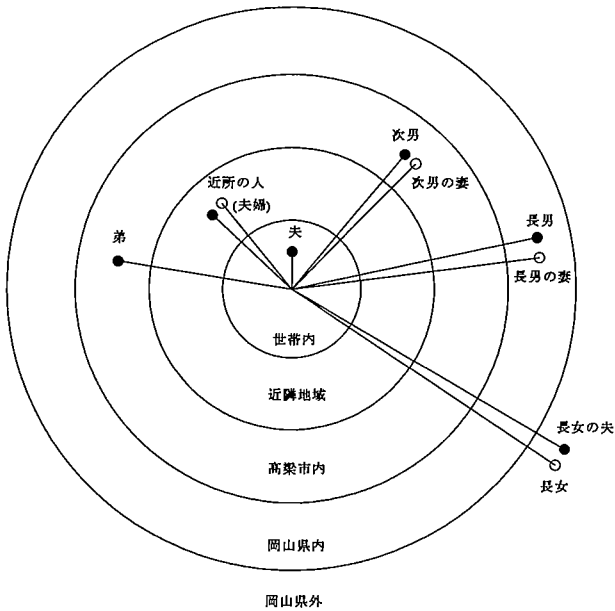


図3 Aさんのパーソナル・ネットワーク
注：黒丸は男性，白丸は女性を表わす。

男夫婦とは週に1回以上は会っているし、電話も週に1回以上はしている。近くに住んでいるので、次男が農繁期に農作業を手伝いに来てくれ、稲束を稲架(刈った稲をかけておく木)に掛けたりする体力のいる仕事をしてくれる。Aさん夫婦で野菜作りはできるけれど、体力のいる作業がある稲作は次男の手助けがないととてもできない。長女夫婦は広島県に住んでいる。長女夫婦とは年に数回ほどしか会わないが、電話では月に数回は話をする。長女は遠くに住んでおり、他の家に嫁いでいるから、農作業を手伝いには来ない。Aさんによれば、もしAさんが病気やけがで2ヶ月から3ヶ月入院したとしたら、夫、長男夫婦、次男夫婦、長女夫婦が世話をしてくれるという。

養子に行った夫の弟が高梁市の高原部に住んでおり、正月、5月の連休、お盆休みにはここに来る。電話では月に数回くらい夫の弟と話をする。親族の他に、留守のときの家の世話などを頼める2組の夫婦が近所にいる。

婦人会が以前はあり、女性が集まってバレー・ボールなどをしていた。しかし、若い女性が部落になくなってしまったので、婦人会はこの部落に現在はない。部落の女性が正月すぎに集まって、お茶会をする。Aさんはちぎり絵などの習い事をしてみたいが、バスの便がないので習い事に参加できない。

④生活満足度

ここなら呑気に暮らせるし、空気もきれいで、生

活も自由である。人ごみの中だと疲れてしまうが、ここならそういったこともない。また、体が丈夫で、自分のことは自分でやれる。こういったことから、Aさんは生活満足度が100点満点で90点であると言っていた。

⑤将来について

長男は定年になったらここに帰ってきて住むと言っている。ただし、まわりの家々に人がそのときいなくなってしまうたら、この部落では暮らしづらい。だから、そのときになってみないと、長男の家族がここに帰ってくるかどうかは分からない。Aさんは長男の家族がここに帰ってきてくれることを希望しているが、戻ってくるとは考えていないようであった。

〔事例2〕 子供夫婦が県内で別居している、身体が多少不自由な高齢女性の事例

①現在の暮らし

高齢女性のBさんは吉備高原の高原部で夫と2人で暮らしている。Bさんは79歳で、夫は82歳である。夫は3年前に脳溢血になりあまり動けない。Bさんも脳溢血をわずらったが、日常生活は自分でおくれる。

Bさんの家は農村地帯の中の奥まった辺鄙な場所にある。まわりに商店はない。バスがこの部落には走っていないので、車がないと買い物に行けず、生活がとても不便である。部落には50年前は6軒あった。その後、1軒の夫婦が高齢になって子供と同居するために部落を出ていったので、現在は5軒になってしまった。部落の戸数が少ないので、組には分かれていない。高齢者がこの部落にはとくに多く、最も若い人で60歳近い。ところで、高齢者が健康を害して1人で暮らせなくなると、子供夫婦と同居するためにしばしば高原部を出て行く。Bさんの家はとても辺鄙な場所にあるので、近所に住む高齢者の多く(別の部落に属している)がそこを離れ、空き家になった住宅がいくつもあ

る。Bさんは急な斜面に棚田を所有している。田植え機や稲刈り機を田に入れられないので、人手で田植えや稲刈りをしなければならず、手間がかかる。Bさん夫婦は自分で食べるくらいしか農業はしていない。農業はBさんだけがやっている。Bさん夫婦は1日の大半を自宅周辺ですごす。Bさんの家の前はかなり急な斜面で、棚田となっている。しかし、Bさん夫婦はそこを耕作しなくなってしまったので、雑草が茂り、棚田は荒れていた。

農家が減っているの

まわりにあったころは、イノシシが出ることはなかった。Bさん夫婦は田畑をトタンで囲ってイノシシが入り込まないようにしているが、イノシシがすき間を見つけて田畑に入り、農作物を食べたり、踏み荒らす。Bさんは「イノコ（イノシシ）との戦争だ」と言っていた。

Bさん夫婦は身体が不自由なので、2輪車（スクーター）はもう運転できない。2週間に1度タクシーを呼んで備中川面駅まで出て、そこから伯備線に乗って備中高梁駅までに行き、病院に通院している。老人保険制度のおかげで医療費はそれほどかからないが、通院のためのタクシー代が往復で約3000円もかかってしまい、夫婦にとって大きな出費である。車で食料品を売りに来る人がいたが、最近病気になるようになって来なくなってしまったので、買い物が不便になった。岡山市の郊外に住む長男が日曜や祭日にBさんの家に来てくれるが、そのついでに食料品を買ってきてもらっている。また、Bさんが通院に備中高梁駅まで出るついでに食料品を買って帰る。バスの便がないので、買い物や通院に備中高梁駅に簡単には行けない。交通手段がないことがBさんにとってここで暮らすうえで一番困ったことである。

②高原部に住み続ける理由

Bさんの近所に住む知り合いの高齢者は家を処分して都会に住む子供夫婦と同居したものの、一日中することがなくまた子供夫婦に気を遣って困っているという。長男はBさん夫婦に同居を勧めてくれる。しかし、Bさん夫婦は都会に出た近所の高齢者がどのような生活をしているかを知っているから、長男夫婦と同居せず、高原部で夫婦2人で頑張っている。ここに住んでいれば息子夫婦に気兼ねをしないで、農業ができるからである。また、都会に出してしまうと仕事がないけれど、ここには農業ができる。こういった理由から、Bさん夫婦は高原部に住み続けている。

③パーソナル・ネットワークとソーシャル・サポート

Bさんのパーソナル・ネットワークは図4のようである。パーソナル・ネットワークは、夫、息子、娘をはじめとする親族から構成されている。

Bさんにお金がないとき、お金を貸してもらおうといったささいなことでは夫に助けをもらうことはある。しかし、夫は体が悪いので、Bさんの生活を助けることはあまりできない。長男は岡山市の郊外に住んでいて、Bさんの家まで車を運転して約1時間で行くことができる。長男は毎週の日曜や祭日に車で来て、農作業を手伝ったり、Bさん夫婦を車でいろいろなところに連れて行ってくれたりする。岡山

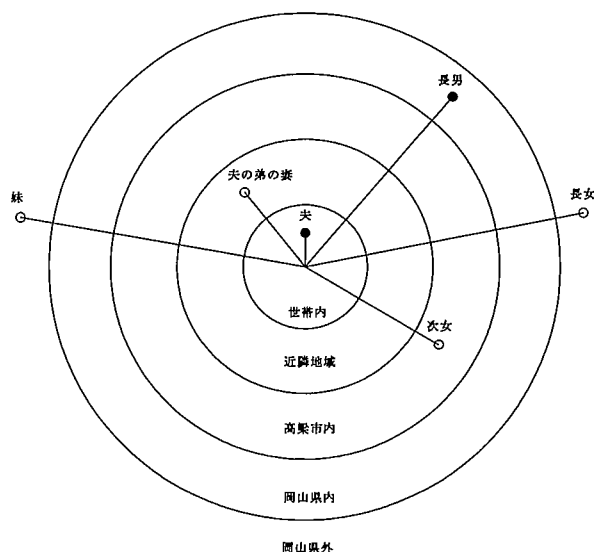


図4 Bさんのパーソナル・ネットワーク

注：黒丸は男性，白丸は女性を表す。

市にある長男の家に泊まりに連れて行ってくれるときもある。Bさん夫婦が葬式の手伝いなど部落のつとめをできないときは、長男が来てやってくれる。Bさんは電話で長男と週に1度は話をする。もしBさんが病氣やけがで2ヶ月から3ヶ月入院したとしたら、長男が主に世話をしてくれるという。長女は大阪府に住んでいて、正月、5月の連休、お盆休みには戻ってくる。電話では月に1度ほど長女と話をする。遠方に住んでいるので、長女には援助を頼むことはできない。次女は高梁市の平野部に住んでいる。次女とは月に1度ほど会うし、電話で月に数回は話をする。困ったときの相談は次女とする。長女や次女は他の家に嫁がせたので、農作業の手伝いは頼まない。

夫の弟が近所に分家をしていて、やはり夫婦で暮らしている。夫の弟夫婦とは農作業をしているとき会って立ち話をしたり、互いの家を訪ねて世間話をする。だいたい週に数回は会っている。その妻には留守のときの家の世話などちょっとしたことは頼めるし、困ったときの相談もする。広島県に住んでいるBさんの実の妹とは電話で月に1度ほど電話で世間話をするが、会うことはほとんどない。

Bさん夫婦に急病など万一のことがあるときは、高梁市内にいる次女がすぐに駆けつけてくれるし、岡山市にいる長男も来てくれる。また、近所にいる夫の弟夫婦もそうしたときは助けしてくれる。だから、Bさんは「ここで安心して暮らせる」と言っていた。

高梁市役所は高齢者にホーム・ヘルパー派遣の

サービスをおこなっている。しかし、Bさんはそれを申し込んだことはない。

Bさんは老人クラブに加入しており、年に2回ほど道路の清掃や空き缶拾いをした。また、老人クラブの旅行に参加したり、総会にも出席した。

④生活満足度

Bさんは血圧が高く、脳溢血で倒れたから、以前ほど働けない。このことは不満だ。でも、長男が頻繁に来て、農作業や買い物をしてくれる。だから、生活満足度は100点満点で70点くらいだと、Bさんは言っていた。

⑤将来について

長男の家族がここに将来戻ってくるかどうかは分からない。イノシシがここに出るようになって、農業もできない。また、ここでは仕事もない。だから、自分たちがいずれ長男夫婦の家に同居することになるだろうと、Bさんは考えている。

〔事例3〕 長男夫婦と同居している、健康な高齢女性の事例

①現在の暮らし

高齢女性のCさんは、夫、長男夫婦、孫3人と高原部で暮らしている。Cさんは68歳、夫も同じ年齢である。Cさんと夫は共に健康である。長男夫婦は共働きである。長男とその妻の職場は備中高梁駅の近くにある。孫は小学生と中学生である。小学校や中学校は家の近くにはなく、孫たちは山を下りた平野部にある学校まで通っている。

Cさんの家のまわりは農家ばかりで、商店はない。このあたりにバスは走っていないので、車がないと買い物にも行けない。かつてはこの部落の近くに小学校があったが、閉校になってしまった。交通の便が悪く、小学校もなくなってしまったので、多くの人々が一家であるいは年老いた両親を残して部落を出て行ってしまった。50年前は28軒あったが、現在は10軒に減ってしまった。そのため、廃屋となった住宅がCさんの家のまわりに多い。また、耕作されない田畑も多い。そうした田畑では樹木や雑草が茂っている。田畑は荒れはて、もとの山林になりつつある。今では、部落で小中学生の子供がいるのはCさんの家だけである。

部落は3つの組に分かれている。以前は同じ組に属する家の間で助け合って、葬式をあげていた。ところが、部落に住む人が少なくなってしまったために、部落全体で助け合っておこなうようになった。葬式をあげる家と同じ組の家からは2人、別の組の家からは1人が出て手助けをしている。田植えが終わった後に、部落の人が全員集まって、一緒に食事

をする。これ以外の部落全体でおこなう活動は、葬式のときの援助くらいである。

Cさん夫婦は自家用に野菜を栽培している。稲作には体力が必要なので、長男が中心となって米を作っている。長男は週末に農作業をしている。長男の妻は農家出身でないので、農作業はやらない。Cさんは農業をして1日のほとんどを自宅や田畑で過ごす。

過疎がこの部落で進んでいるので、このあたりにはイノシシが多く出没し、田畑をしばしば荒らしている。そこで、Cさんの家の前にある畑にはイノシシが入り込まないように、柵が作られていた。また、イノシシを捕獲する罠が畑の中に設置してあった。

長男夫婦と孫たちは同じ敷地内にある別棟で暮らしている。Cさんが食事の準備をし、長男の家族と一緒に食事をしているが、洗濯などそれ以外の家事は長男の家族とは別々にやっている。

Cさんは車を運転しないが、Cさんの夫は運転する。だから、長男夫婦に送迎を頼まなくてよい。夫に車を運転してもらい、Cさんは週に2回ほど落合町にある郊外型の大型店に買い物に行く。Cさんは体が丈夫であるが、部落の中の少し遠いところに行くときは、1人乗りの電動カーを使う。Cさん夫婦は長男夫婦にあまり頼らず自立して生活しているから、同居していることで、共働きの長男夫婦がCさん夫婦よりも助かっているようであった。

長男が車で朝通勤するときに子供たちを同乗させて学校まで連れて行く。長男の妻の実家は高梁市の平野部にあるので、子供たちは放課後その家に行く。長男が帰宅するときに、妻の実家に立ち寄って子供たちを連れて帰る。

②高原部に住み続ける理由

都会に移り住むと、仕事がCさん夫婦にはなくなってしまう。高原部に住んでいれば農業ができるので、住み続けている。「家」制度の考え方から、長男夫婦はCさん夫婦と同居している。長男の家族は高原部に住みたいとは考えていない。この周辺に同年代の子供が1人もいないことから、とくに孫たちは小さいころ都会に住みたいと言い張っていた。でも、Cさん夫婦がこの部落にいたので、長男の家族は高原部を出られないでいる。

③パーソナル・ネットワークとソーシャル・サポート

Cさんのパーソナル・ネットワークは図5のようである。パーソナル・ネットワークは夫、息子、娘をはじめとする親族から構成されている。

夫と助け合いながら農業をしている。夫には車で

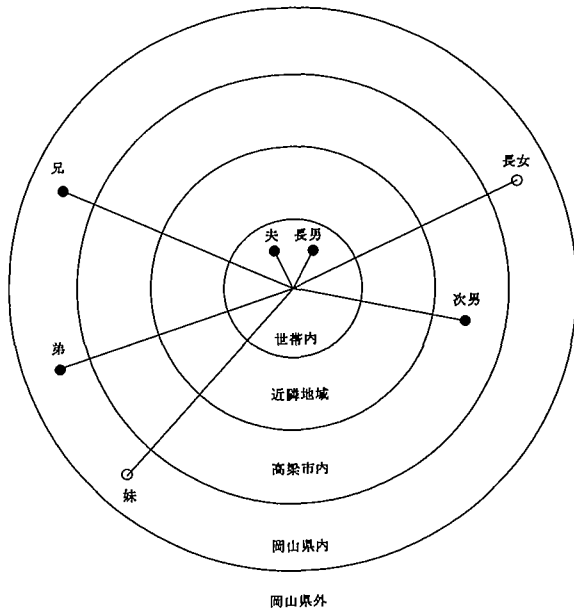


図5 Cさんのパーソナル・ネットワーク
注：黒丸は男性，白丸は女性を表す。

送迎をしてもらったりもする。同居する長男には農作業をしてもらっているし、困ったときの相談も長男にする。次男は高梁市の平野部に住んで、岡山市にある職場に通っている。仕事が忙しいので、あまり実家に来ない。正月、5月の連休、お盆休みに帰ってくるくらいだ。電話では月に1回ほど話す。稲刈りのときは、次男は2日ほど手伝いに来てくれるし、困ったときの相談も次男にする。長女は岡山市に住んでいる。長女は働いているので、あまり実家に来られない。正月、5月の連休、お盆休みに帰ってくるくらいだ。電話で、週に1回以上は長女と話をする。他の家に嫁がせたのだから、長女に農作業を手伝ってもらうことはない。困ったときの相談を長女にしたりするくらいだ。もしCさんが病気やけがで2ヶ月から3ヶ月入院したとしたら、長女が主に世話をしてくれるという。

Cさんの兄と弟が倉敷市に、妹が玉野市に住んでいる。彼らとは、正月、5月の連休、お盆休み、法事、結婚式のときに会ったり、電話でときどき世間話をする。

Cさんは、婦人会、老人クラブ、愛育委員会に加入している。老人クラブでは、日帰りの旅行をしたり、月に1回集まっておしゃべりや手芸を習ったりする。また、年に2回ほど草取りや道路の掃除もしている。愛育委員としては、地域での予防接種や健康診断の世話をしている。

④生活満足度

Cさんは農業を多少しながら、自立して暮らせる

ことに満足している。また、Cさんは孫が成長して一人前になるのを見るのが楽しみである。ただし、孫が中学生になって、Cさんをあまり相手にしなくなってきたのが、Cさんには寂しいようだ。Cさんは、生活満足度は70点であると言っていた。

⑤将来について

前述のように、同居する長男の家族は辺鄙な高原部にあえて住みたいとは思っていない。だから、自分たちが死んだら、長男夫婦は部落から出て行こうと、Cさんは考えている。とくに孫たちは大きくなったら絶対に部落から出て行くと、Cさんは確信している。

〔事例4〕 長男夫婦と同居している、身体が不自由な高齢女性の事例

①現在の暮らし

高齢女性のDさんは、長男夫婦、孫2人と高原部で暮らしている。Dさんは70歳、夫は72歳である。Dさんは10年前から脳溢血で半身が不自由となっているが、壁につかまりながらゆっくり歩くことはできる。Dさんの夫は健康である。長男夫婦は共働きである。長男の職場は総社市にあり、その妻は高梁市の平野部で働いている。

Dさんの家のまわりは農家ばかりである。家から15分ほど歩いて下ったところにバス停があり、ここから備中高梁駅まで行くバスが1日に6便ある。そのバス停の前に、小さな商店が1軒ある。Dさんの部落には50年前は60軒あったが、現在は42軒ある。バスが走っているから、この部落の世帯数はあまり減少していない。部落の半数くらいの世帯では、高齢者と子供夫婦が同居している。部落は3つの組に分かれており、17軒がDさんの組には属している。

長男が週末に農作業をして、米を作っている。長男の妻はほとんど農作業をしない。Dさんの夫は桃の栽培をしているが、以前ほど農作業はしていない。体が不自由なので、Dさんは自宅とそのまわりにいることが多い。

長男夫婦と孫たちは同じ敷地内にある別棟で暮らしている。Dさん夫婦は長男夫婦とは食事を別にしており、家事も別々にやっている。Dさんは体が悪いので、夫が買い物をしたり、食事を作る。Dさんの夫は車を運転しないので、長男が朝出勤するときに車で備中高梁駅のあたりに連れていってもらう。その近辺で買い物をして、バスで自宅に戻る。Dさんは洗濯や掃除といった家事や近所の草むしりくらいはしているが、農作業はできない。備中高梁駅近くにある病院に月に2回通院している。Dさんは車を運転できないので、長男が会社に出勤するとき車

に同乗させてもらって病院に行き、タクシーで帰ってくる。長男の妻が仕事に車で行くときに、子供たちを平野部にある小学校と中学校に連れて行く。そして、子供たちはバスで帰宅する。

高梁市役所はデイ・サービスの事業をおこなっている。虚弱な高齢者や寝たきりの高齢者をバスでデイ・サービス・センターに連れて行き、給食、入浴、リハビリなどのサービスをおこなっているのだ。Dさんは月3回デイ・サービスに行き、手芸を習っている。Dさんの家を少し登ったところにコミュニティ・ハウスがあり、近所の人たちが習字や縫い物を一緒にする会が月に1回そこで開かれている。Dさんはこの習い事にも参加している。

②高原部に住み続ける理由

Dさんの実家はこの部落にあり、近所に幼なじみがいる。この部落にいれば、そうした人たちと交流ができるので、Dさんは高原部で暮らしている。長男夫婦はここにいれば住宅があるので、この部落に両親と同居して暮らすのに不満はない。

③パーソナル・ネットワークとソーシャル・サポート

Dさんのパーソナル・ネットワークは図6のようである。体が不自由なので、Dさんが社会関係を取り結ぶ相手は世帯内か近隣地域にしかない。夫は家事をして、Dさんの毎日の生活を助けている。同居する長男やその妻には買い物や病院に連れていってもらったり、農作業をしてもらっている。もしDさんが病気やけがで2ヶ月から3ヶ月入院したとし

たら、長男の妻が主に世話をしてくれるという。同じ部落にDさんの実家があり、兄がその家を継いだ。その兄嫁とはコミュニティ・ハウスで習い事を一緒にしている。隣の家の高齢女性とは世間話をしたり、手芸の作業を自宅でするときに助けてもらっている。

次男は高梁市内に、長女は総社市に住んでいる。次男や長女は働いていて忙しいので、正月、5月の連休、盆のときにDさんの家に来るくらいだ。彼らに援助をしてもらってはいない。

④生活満足度

デイ・サービスに行ったり、コミュニティ・ハウスの習い事に参加することによって、他的高齢者と交流することができる。Dさんはそうした交流を楽しんでいる。また、Dさんは自宅で鉢植えの植木を楽しみながら栽培している。同居している長男夫婦にもいろいろ助けてもらえ、Dさんはそれを「長男夫婦に可愛いがってもらっている」と表現していた。体が悪いけれど、趣味を楽しむことができ、同居する長男夫婦に助けてもらえるので、Dさんは生活満足度が80点であると言っていた。

⑤将来について

Dさん夫婦は以前は同じ棟で長男の家族と暮らしていた。孫たちが大きくなってきたので、長男夫婦は同じ敷地内に別棟を建てて、現在はそこに住んでいる。この部落で同居していれば住宅費がかからないので、長男夫婦は今後もDさんと同居して暮らすつもりである。

6 事例の検討

筆者は約100人の高梁市の高齢女性に聞き取り調査をおこない、そのうちの4人の事例を提示した。この4人の事例を主な例証とし、必要な場合にはその他の高齢女性の事例を紹介しながら、高梁市の高原部に住む高齢女性の暮らしを検討したい。

(1)高齢女性が高原部にとどまる理由

合併以前に村役場のあったところを除いて、商店、診療所、郵便局、学校などは高原部ではない⁶⁾。鉄道の駅からは遠いうえに、バスの路線から外れた部落も多い。たとえバスが走っていても、バスの便はとても少ないことは前述の通りである。生活関連施設が高原部ではこのように不足しているので、生活は不便である。にもかかわらず高原部にとどまる理由として、[事例1]のAさん、[事例2]のBさん、[事例3]のCさんは都会に移り住むと、仕事がなくなってしまうということをあげていた。高原部にとどまる限り、農作業ができる。若い

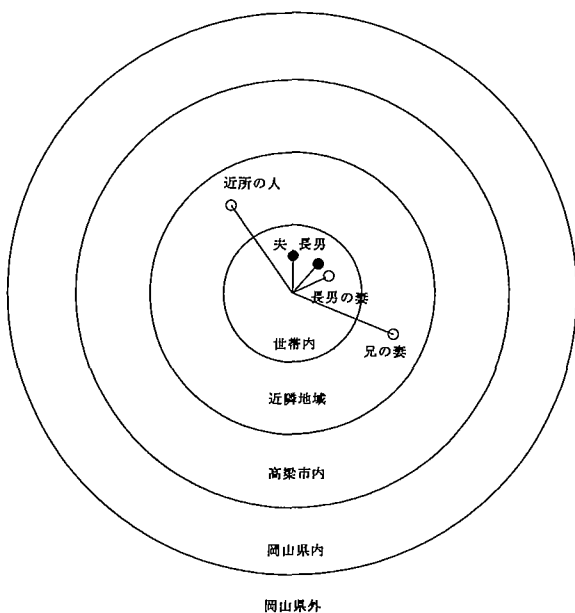


図6 Dさんのパーソナル・ネットワーク

注：黒丸は男性、白丸は女性を表わす。

ときのように農作業ができなくとも、近所の草むしりなど慣れ親しんだ仕事を続けられる。彼女たちは農作業をすることに生きがいを感じると言っていた。ある別の高齢女性は、「農業をしながら、植物のつぼみができるのを見るのが楽しみだ」とも語っていた。要約すれば、高齢者は自らの生きがいとして農業をするために、高原部にとどまっているのである。

これに関連して、高齢者は収益をあげることを主な目的に農業をしているのではないことも、指摘しておかなければならない。農村部に住む大部分の高齢者は自家用（子供夫婦に農産物をあげることを含めて）に農業をしていたり、ときには栽培したいくらかの農作物を市場に出荷している。ただし、田植え機や稲刈り機といった稲作用の機械を一式買い揃えると数百万円かかってしまうから、農業をやめて米や野菜を買って暮らしたほうが費用がかからないそうだ。つまり、高齢者が米や野菜をたとえ市場に出荷していても、収益を上げるというよりも、自分の楽しみのために農業をしているのだ。

高原部で暮らす理由として、次のようなこともあげられた。まず、子供夫婦と同居したときに起こる子供夫婦との人間関係の問題である。同居し始めは子供夫婦が丁重に扱ってくれるが、子供夫婦とは価値観が異なるから、子供夫婦は両親をだんだんと負担と感じ、邪険に扱う。また、子供夫婦と同居すると気がねをするという。Bさんは、子供と同居するために都会に出た高齢者がそうした体験をしていることを周囲でしばしば見聞きしていた。そうした見聞から、彼女は子供夫婦と同居するのがいやだと言っていた。次に、高原部に住んでいれば、年齢が近い人が近所にいて話が合うというとか、お茶に誘われたりするということをあげた高齢女性もいた。

〔事例4〕のDさんは体が不自由で農作業ができないので、彼女はこれを理由にあげていた。提示しなかった事例であるが、ある高齢女性は生まれ育った土地に強い愛着があるから、都会に出てくすのがいやだと言っていた。これらの理由もあげていたけれども、ほとんどの高齢女性が高原部で暮らす理由としてあげたのは、農作業を続けて、生きがいを持っていたいということであった。

(2)子供夫婦が年老いた両親と同居する理由

〔事例3〕のCさんと〔事例4〕のDさんは長男夫婦と同居していた。長男夫婦は共働きで、農業以外の仕事に平日は就いていた。そして、高梁市の旧高梁町や落合町、あるいは総社市にある職場に車で通勤していた。とすれば、こうした子供夫婦は高原

部で両親と同居するよりも職場の近くに住んだ方が通勤に便利であると考えられる。さらに、生活関連施設が高原部では不十分で、生活が不便である。にもかかわらず、子供夫婦が両親と同居して高原部で暮らすのは、次のような2つの理由からである。

第1に、「家」制度がこの地方で残っているために、長男夫婦が両親である高齢者のもとに同居していることである。前述のように、自らの生きがいのために、高齢者は高原部にとどまって農業をしている。長男夫婦が「家」を相続し、年老いた両親の世話をすべきという「家」意識がその地方ではいまだ根強い。Cさんが語っていたように、高齢者夫婦が農業をするために高原部に住み続けるので、長男夫婦が仕方なしに同居してそこにとどまっているのだ。

第2に、子供夫婦が両親と同居すれば、住居費がかからないという利点がある。高原部においても、バスが走っているような生活関連施設が多少は整備されている部落もあれば、そうした生活関連施設がまったくない辺鄙な部落もある。生活関連施設がある部落では、子供夫婦が両親と同居すれば、住居費がかからないという利点は大きい。この理由から、〔事例4〕の長男夫婦はDさん夫婦と同居していた。

ところが、バスが走っていないような辺鄙な部落では、生活がとても不便である。例えば、小中学生の生徒がいても近くに学校がなければ、両親は朝と夕方に学校まで車で送迎してあげなければならない。辺鄙な部落では、生活の不便さという難点は住居費がかからないという利点をはるかに上まわる。このために、「家」制度の考え方があっても子供夫婦は辺鄙な部落に住む年老いた両親と同居したがないので、高齢者ばかりがそうしたところでは暮らしている。例えば、先に紹介した玉川町下切やCさんが住む部落はそうしたところである。Cさんのように、子供夫婦が辺鄙な部落で年老いた両親と同居するという事例は非常に数が少なかった。

(3)ソーシャル・サポート

高齢女性がどのように援助を入手しつつ高原部で暮らしているかの4つの事例を見た。〔事例1〕と〔事例2〕は子供夫婦と別居している高齢女性の事例であった。〔事例1〕では次男が〔事例2〕では長男が近くに住んでおり、年老いた両親を頻繁に訪問し、農作業や買い物などをしてあげていた⁸⁾。〔事例3〕と〔事例4〕は子供夫婦と同居している高齢女性の事例であった。〔事例3〕のCさん夫婦は健康なので、他の人々にあまり援助を受けなくても生

活ができた。それでも、長男夫婦と同居していたので、急病など万一の事態が起こっても長男夫婦に助けてもらえる。[事例4]のDさん夫婦は、同居する長男に買い物や病院への通院の送迎を日常的にしてもらっていた。

ここで見過ごしてはならないことは、子供たちが年老いた両親を平等に援助しているのではなく、子供たちのうちの1人が中心となって両親を助けていたということである。4つのいずれの事例においても、1人の子供がもっぱら高齢者である両親を援助しており、その他の子供は両親を頻繁に訪問していなかったし、あまり援助もしていなかった。例えば、[事例2]の場合、Bさん夫婦を主に援助していた長男は毎週の週末に実家に行っていたが、長女と次女は年に数回しか実家を訪問していなかった。「家」制度の考えから、年老いた両親を主に助けていたのはたいてい長男であった。ただし、[事例1]では、次男夫婦がとても近くで別居していたので、主に次男が両親を助けていた。こうした援助のおかげで、あるいは援助をいつでも期待できるから、高齢者は高原部で生活を営むことができるのである。

高齢女性の4つの事例から読み取れるもう1つのことは、子供以外の人が身辺介護（家事や車での送迎）や農作業をしてはいないということである。高齢女性は近所の人に留守の間の家の世話などといったちょっとしたことを頼んだり、近所の同年輩の高齢者と交遊をする。例えば、Dさんは隣の家の高齢女性に趣味の手芸の作業を手伝ってもらったり、彼女と世間話をしたりはする。でも、4つの高齢女性の事例だけでなく提示しなかった事例においても、高齢者が身辺介護や農作業を子供以外の人にしてもらうということはまったくなかった。

(4)別居する子供の居住地

別居する子供が年老いた両親に援助を提供してあげられるかどうかは、子供がどこに住んでいるかによって大きく左右されると考えられる。そこで、高齢者が夫婦のみで住んでいる場合と子供夫婦と同居している場合に分けて、別居している子供はどこに住んでいるかを検討したい。

まず、高齢者が夫婦のみで住んでいる場合である。[事例1]と[事例2]がこうした高齢女性の事例であった。[事例1]のAさんの長男は倉敷市に、次男は高梁市内の別の場所に住んでいた。[事例2]のBさんの長男は岡山市に、次女は高梁市内の別の場所に住んでいた。これらの場所へは車で1時間以内で行ける。このように、高齢者が夫婦のみ

で暮らしていても、子供の多くは実家の近くに住んでいるのである。提示しなかった事例でも、別居する子供の多くは、高梁市内の別の場所、岡山市、倉敷市、総社市といった岡山県内に住んでいた。夫婦のみで暮らす高齢女性で、すべての子供が県外にいるというのはほんの数例しかなかった。

この知見は次のことを意味する。高齢女性が夫婦のみで住んでいても、高齢者を中心的に援助する1人の子供がいるということを指摘したが、そうした子供は年老いた両親の近くに住んでいるのだ。だからこそ、[事例2]のように、子供が毎週の週末に実家に行き、両親の世話ができるのだ。こうした援助のおかげで、高齢者夫婦のみでも、あるいはBさんのように体が多少不自由であっても、高齢女性が高原部で暮らしてゆけるのである。さらに、中心的に援助する子供だけでなく、日常的にはあまり会わないその他の子供もその多くが両親の近くに住んでいる。だから、Bさんが語っていたように、急病になるといった万一の事態が発生しても、子供がすぐに駆けつけてくれるから、高原部で「安心して暮らすことができる」のである。

次に、子供夫婦と同居して暮らす高齢女性の場合である。[事例3]と[事例4]がこうした高齢女性の事例であった。[事例3]では、長女は岡山市に、次男は高梁市内の別の場所に住んでいた。[事例4]では、長女は総社市に、次男は高梁市内の別の場所に住んでいた。このように、別居している子供の多くは県内に住んでいた。提示しなかった事例でも、別居している子供の多くはやはり県内に住んでいた。同居している子供夫婦が身近にいて助けてくれるから、高齢女性は日頃は別居している子供から援助を受けてはいなかった。しかし、別居している子供もたいてい近くに住んでいるから、万一の事態が発生したとき、同居している子供夫婦からだけでなく別居している子供からも援助してもらえると思える。

(5)電話の重要性

高原部に住む高齢女性にとって、電話が重要であることを指摘しておかねばならない。頻繁に会っている子供と電話でもよく話していたが、別居していて、年に数回しか会わないような子供夫婦とも、高齢女性は電話では頻繁に世間話をしていた。例えば、[事例1]のAさんは倉敷市に住む長男や広島県に住む長女と年に数回しか会わないが、電話では月に数回話をしていた。このように、電話は高齢女性にとって子供との重要な交流の手段である。

さらに、提示しなかった事例では、電話は近所の

人たちとの安否確認の手段でもあった。傾斜地にある部落では、ほとんどの住民が高齢者である。そうした部落では隣家に行くのも高齢者にとってはたいへんであるので、高齢者は毎日のように近所の家に電話をして世間話をし、互いの安否を確認しあっている。

(6)主観的幸福感

高齢者の主観的幸福感に関して、高齢者は中年期の活動を継続することが幸福感を持つことに繋がるのだという「活動理論」が提起されている。つまり、「人間は社会的相互作用の中に組み込まれ、活動しつづけることが望ましく、老年期においても中年期からの活動を何らかの形で維持し、あるいは代替的な活動を探すものである」（奥山 1986）というのである。

4人の高齢女性の生活満足度は70点から90点であったから、彼女たちは割合に幸福と感じていたといえる。そこで、彼女たちが生活に満足している理由を尋ねたところ、その理由は次のようであった。

〔事例1〕のAさんは、自由な生活、農村の自然環境、自らの健康をあげた。〔事例2〕のBさんの場合は、長男が生活を助けてくれることであった。

〔事例3〕のCさんは農作業ができることを理由にあげた。〔事例4〕のDさんの場合は、趣味の活動（手芸や植物栽培）、人々との交流、同居する長男夫婦が生活を援助してくれることが理由であった。彼女たちが生活に満足している理由は、このようにさまざまであった。これらの事例の中で、CさんとDさんだけが自らおこなっている活動を生活の満足に結びつけていた。つまり、Cさんは農作業ができるから、Dさんは趣味の活動ができるから、生活に満足していると答えていた。ところが、AさんとBさんは自らおこなっている何らかの活動を生活の満足に関連づけてはいなかった。このことは、活動理論の有効性に疑義を投げかけるかもしれない。ところが、回答に現れてこなかった事柄を補ってみると、これら4人の高齢女性には次のような共通点があることが分かる。

まず、毎日の生活をおくる条件が整っているということである。これら4人の高齢女性の収入は国民年金であり、夫婦の年収は100万円から200万円であった。しかし、米や野菜を栽培しているので、出費はそれほどかからない。だから、年収がこのくらいであっても夫婦で十分に生活ができるのである。また、前述のように、毎日の生活を援助してくれる、あるいは、必要なときにはいつでも援助してくれる子供やその配偶者が、これら的高齢女性のいず

れにもいた。こうした基本的な生活条件が満たされていたから、4人の高齢女性は安心して暮らしていた。

次に、生きがいを持っておこなっている活動がこれら4人の高齢女性にはあるということだ。Aさん、Bさん、Cさんは、高原部に住み続ける理由として慣れ親しんだ農業をするためと答えていた。つまり、彼女たちは農作業をすることに生きがいを見いだしているのだ。Cさんだけが農作業ができるから生活が満足であると答えていたが、AさんとBさんの場合も、農作業ができることが高い生活満足度に繋がっていたと推論できる。Dさんは体が不自由で農作業ができないが、それに代わる趣味の活動を楽しんでおこなっていた。農作業であるにしろ趣味の活動であるにしろ、これら4人の高齢女性には生きがいを持っておこなえる活動があった。

生活満足度が割合高いこれら4人の高齢女性には、この2つの共通点があるのだ。これから、生活満足度に関して次のような因果関係を推論できる。つまり、基本的な生活条件が整っている上で、4人の高齢女性が生きがいをもって何らかの活動をしていたから、生活満足度が高かった。なぜ生活に満足しているかと尋ねられたときに、その理由を組織的には説明することはむずかしいから、4人の高齢女性はその因果関係の一部を断片的に述べていたと考えられる。BさんとDさんは毎日の生活条件が整っているという部分を理由にあげたのに対し、Cさんは生きがいを持っておこなえる活動があるという部分を理由にあげたのだろう。とするならば、活動理論は主観的幸福感を説明する仮説として有効であると考えられる。

(7)高原部の将来

中年以下の世代の人々は部落の外に頻繁に出かける。例えば、高齢者と同居する子供夫婦は職場に通勤したり、買い物に部落の外に出かける。小中学生は学校に通学している。これらの人々ほど頻繁ではないにしろ、高齢者も買い物に出かける。人々がこうして出かけるときには、自分で車を運転したり、バスを利用したり、あるいは、誰かに車で送迎してもらう必要がある。つまり、高原部で暮らしてゆくためには、交通手段を確保できているかどうかが決定的に重要なのである。

高原部を走るバスの便は少ないけれど、バス路線に沿った部落では、最低限の交通手段は保証されている。例えば、小中学生は平野部にある学校にバスで通学できるので、両親が生徒を送迎しなくてもよい。また、車を運転できない高齢者でもバスで買い

物や病院への通院に出かけられる。交通手段があることから、高齢者と同居している子供夫婦の多くは部落にずっと住み続けるだろうし、別居している子供夫婦が部落にこの先戻って来ることもあるだろう。[事例4]はバスの走っている部落の事例であったが、長男夫婦はDさんの家にずっと住むつもりであった。バス路線に沿った高原部の部落では、過疎化が更に進むかもしれないが、一世代あとの20年後にも住民が住んでいると予想できる。

ところが、バスが走っていない辺鄙な部落では、交通手段の確保が住民にとって大きな問題である。例えば、両親は小中学生を学校に送迎してあげないといけなく。車を運転できない人は、買い物や病院への通院にタクシーを呼んだり、誰かに送迎を頼まないとはいけなく。こうした不便さから、高齢者と同居している子供夫婦の多くは部落を将来は出ていってしまうだろうし、別居している子供夫婦がいつか部落に戻ってくることはないだろう。提示した事例でも、このことは明らかだ。[事例1]、[事例2]、[事例3]はバスが走っていない部落での事例であった。いずれの事例でも、子供夫婦が他の場所から部落にいつか戻ってくる、あるいは、同居している子供夫婦が部落に将来も住み続けると、高齢女性は考えていなかった。バスの走っていない高原部の部落は20年後にはほとんど誰も住まない地域になっていると予想できる。

(8)郊外型大型店の出店の影響

前述のように、駐車場が敷設された郊外型の大型店が旧高梁町と落合町阿部に開店した。そのために、高原部にある商店が閉店に追い込まれているのである。事例として提示しなかったけれども、このことを松原町で見てみたい。松原町は落合町の北に位置し、高原部にある。松原町から落合町阿部までは車で15分ほどで行ける。松原町の中心(松原町春木)にかつては3軒の商店と1軒の酒屋があった。落合町阿部に大型店が出店したところ、松原町の住民は大型店で買い物をするようになり、地元の商店ではあまり買い物をしなくなった。その結果、松原町にあった2つの商店は閉店を余儀なくされ、酒屋はあまり店を開けなくなってしまった。1軒の商店がからうじて営業しているが、経営者は以前ほどもうからなくなってしまったとこぼしていた⁹⁾。

車で行ける場所に大型店が開店したので、高梁市の住民にとっては生活が便利になったように思われるかもしれない。ところが、高齢者にとってはそうではない。高齢者の多くは車を運転できない。そうした高齢者は旧高梁町や落合町阿部の大型店に簡単

には行けないから、地元で買い物をせざるをえないのである。大型店が開店し、地元の商店が閉店したために、多くの高齢者は買い物をしづらくなり、暮らしにくくなったと言っていた。

7 結 論

本稿では、まず、高梁市を構成する地区のうちの玉川町、宇治町、松原町において過疎化が、宇治町と松原町において高齢化がとりわけ進んでいることを国勢調査のデータによって明らかにした。次に、筆者が同市において聞き取り調査をおこなったが、この調査で収集した事例のうちから4つの事例を提示した。これを主な例証として、同市の高原部に住む高齢女性がどのような暮らしをしているかを明らかにした。判明したのは次の8点である。

- (1) 多くの高齢女性は、慣れ親しんだ農作業を続けて、生きがいをもちたいということで、高原部で暮らしていた。
- (2) 「家」制度の考えから、子供夫婦が年老いた両親と同居して暮らしていた。また、バスが走っている部落では、住居費がかからないという利点からも、子供夫婦が年老いた両親と同居し暮らしていた。
- (3) 子供たちが年老いた両親を平等に援助しているのではなく、子供たちのうちの1人が中心となって両親を助けていた。また、子供以外の人が身辺介護(家事や車での送迎)や農作業をしてはいなかった。
- (4) 夫婦のみで暮らす高齢女性の場合でも、子供夫婦と同居している場合でも、別居する子供の多くは岡山県内に住んでいた。
- (5) 電話は頻繁には会わない、別居している子供たちと高齢女性が交流する大切な手段である。また、傾斜地にある部落では、高齢者は電話で近所の人々と安否を確認しあっている。
- (6) 基本的な生活条件が整っている上で、高齢女性が生きがいを持って何らかの活動をおこなっているとき、生活満足度が高かった。このことは、主観的幸福感に関する「活動理論」の有効性を裏づける。
- (7) バス路線に沿った高原部の部落では20年後にも住民が住んでいるが、バスの走っていない高原部の部落はそのときにはほとんど誰も住まない地域になっていると予想できる。
- (8) 郊外型の大型店が旧高梁町と落合町阿部に開店したために、高原部にある商店が閉店に追い込まれている。そのために、高齢者は買い物をしづらくなっている。

(注)

- (1) 高梁市役所は高梁川に沿った伯備線の駅周辺の土地（谷底平野部）に宅地を造成し、分譲している。筆者の聞き取り調査によれば、高梁市の高原部で生まれ育った30歳代から40歳代の夫婦が宅地を購入して家を建て、暮らしていることが多かった。
- (2) 高梁市の農村では、小字のことを部落と呼んでいる。
- (3) 診療所が中井町、宇治町、松原町の地域市民センターに置かれている。
- (4) 1995年における宇治町宇治（大字）の人口は252人であり、世帯数は87世帯であった。年少人口の割合は9.5%，高齢人口の割合は38.5%である。そして、16.1%が高齢単身世帯、18.4%が高齢夫婦世帯である（国勢調査による）。
- (5) 高原部にある実家を出て、子供夫婦と近くの都市で同居し、耕作のために自分の田畑に通っている高齢者も少なからずいる。また、ふだんは子供夫婦と近くの都市で同居して、ときどき1週間ほど高原部にある実家で暮らすといった高齢者もいる。
- (6) 組単位ではなく部落単位で助け合いをするようになったという事例は、過疎化が進んだ他の部落でもしばしば見られた。さらに、祭も変化している。過疎化と高齢化が進んだある部落では高齢者ばかりが住んでいるので、祭りの日に神輿をかつぐことができなくなった。そこで、当日、部落の人々が集まり、仕出し弁当を取って飲食をするだけになった。
- (7) 〔事例4〕の部落はかつて村役場があったところではないけれど、部落の近くに小さな商店があった。高梁市では、高原部のこうした場所に商店があることは今日ではきわめてまれである。
- (8) 高齢者が年を取って体が弱くなったために、農

作業をできない世帯も最近では出てきた。そこで、賃金を払って営農組合や他の農民に田植えや稲刈りをしてもらうことがおこなわれるようになった。提示しなかった事例の中には、子供夫婦と同居していても、賃金を払って営農組合や他の農民にそうした農作業を頼んでしまう高齢者もいた。また、高齢者は賃金を払って営農組合や他の農民に農作業を頼んでいるので、別居する息子が実家の両親のところに農繁期にせっかく手伝いに行っても、農作業をそばで見ただけという事例もあった。

- (9) 平野部にある備中川面駅周辺でも、同様のことが起こった。食料品を売る小さな商店が駅の周辺に数軒あった。ところが、郊外型の大型店が開店したために、その近辺の住民は車で大型店に食料品を買いに行くようになった。食料品が売れなくなってしまったので、そうした商店は店を閉じたり、転職してタクシーの営業を始めたりした。

(引用文献)

- 野邊政雄. 1999. 「高梁市高齢女性のパーソナル・ネットワークと主観的幸福感調査」の基礎分析, 『岡山大学教育学部研究集録』, 第112号, 57-78頁.
- 奥山正治. 1986. 「高齢者の社会参加とコミュニティづくり」, 『社会老年学』, 第24号, 67-82頁.
- 高梁市総務部企画課. 1995. 『高梁市総合計画（第3次）——文化を育み健やかで活力のあるまちを目指して——』, 高梁市.

〔謝辞〕

高梁市の多くの女性が調査に応じて日々の暮らしを話してくれました。この方々に感謝いたします。